東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2008 年 5 月 30 日

隣人との結びつき

親愛なるムスリムの皆様。社会生活を構成する単位として、家庭の次に来るのが近所の人々です。村でも町でも、農地でも庭園でも、職場でも、私達にとって最も近い人々が隣人です。このため、私達の崇高な教えは、隣人との結びつきに重きを置いているのです。

崇高なるアッラーは次のように仰せられておられます。「アッラーに仕えなさい。何ものをもかれに併置してはならない。父母に懇切を尽くし、また近親や孤児、貧者や血縁のある隣人、血縁のない隣人、道づれの仲間や旅行者、およびあなたがたの右手が所有する者（に親切であれ）。アッラーは高慢な者、うぬぼれる者を御好みになられない。」（婦人章第３６節）預言者ムハンマドも、「ジブラーイールは私にいつも、隣人に良く振舞うことを勧めた。あまりにもしばしば勧めたので、隣人達を互いに相続人と定めるのではないか、と考えたほどだった。」とおっしゃっています。

親愛なるムスリムの皆様。隣人との結びつきは、私達の教えが非常に繊細な形で重きをおいているものです。従って、よく振舞うこと、食事を提供すること、挨拶を交わすこと、病人の訪問を行なうこと、運命を分かち合うこと、贈り物をしあうこと、結婚式や葬式に加わること、お悔やみを述べること、害を及ぼすような行動を慎むこと、恥や欠点を探らないこと、必要としているものがあれば助けることなどが、私達の隣人に対する義務なのです。

何年も同じ建物に住んでいるのに、互いを知らない、隣人との結びつきを持たない、多くの人々を見ることができます。階段で行き違う、同じアパートに住んでいる住民との間で交わす挨拶、笑顔、心からの態度で近況を尋ねあうこと、必要であれば隣人が何かに困っていないか訊ねることは、隣人関係の最初の一歩となるものです。私達の教えでは、このような振る舞いはサダカの範疇に含まれるものです。

また忘れてはいけないことは、私達の教えでは、隣人との結びつきは言語や宗教、血筋、宗派、キリスト教であることユダヤ教徒であることなどを問わずに行なわれるものです。預言者ムハンマドはユダヤ教徒の隣人に対しても好意的であり、彼らとも隣人としての付き合いを行なっていたことを様々な文献から知ることができます。

親愛なるムスリムの皆様。人は、家族のメンバーについで、隣人とも、いつもいっしょにいるのです。何かが必要になった時には隣人に助けを求めます。病気などの災難に見舞われた時には、まず隣人が助けに来てくれます。暮らしは隣人と共にあるものであり、隣人との関係はしっかりとした基盤の上に築かれる必要があるのです。隣人を家族の一員と見なし、彼らの名誉や財産を自分のものと同様に守るべきであり、助け合うこと、訪問しあうことを決して忘れてはいけないのです。怒りや不機嫌に振舞うことは全く好ましくないことです。隣人達との間で何かの問題が生じたとしても、円熟した態度でそれを解消するべく努力するべきです。隣人の悪口を言うこと、恥や欠点を探ることは、私達の教えでは禁じられているものです。

良い隣人を見出すためには、まず良い隣人である必要があるのです。隣人とよい関係を保つことができる人々はとても幸福なのです。